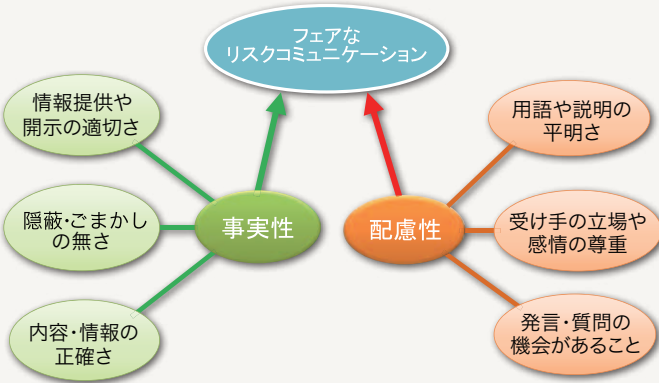




たけにし あこ  
**竹西亜古**  
心の教育実践コース教授

このページでは日本学術振興会の科学研究費補助金を受けた研究を紹介します。科学研究費補助金とは、すべての分野の「学術研究」を段階に発展させることを目的に、独自の・先駆的な研究に対して助成を行うものです。基盤研究、挑戦的萌芽研究、若手研究などに分かれており、基盤研究は1人または複数の研究者が共同で行う研究が対象。研究期間は3～5年です。



【図1】フェアなリスクコミュニケーションの要素  
竹西ら(2008)より作成

# ステイグマ化されたリスクの知覚 感情と公正のヒューリスティックモデル

(平成19～22年度科学研究費補助金・基盤研究に採択)

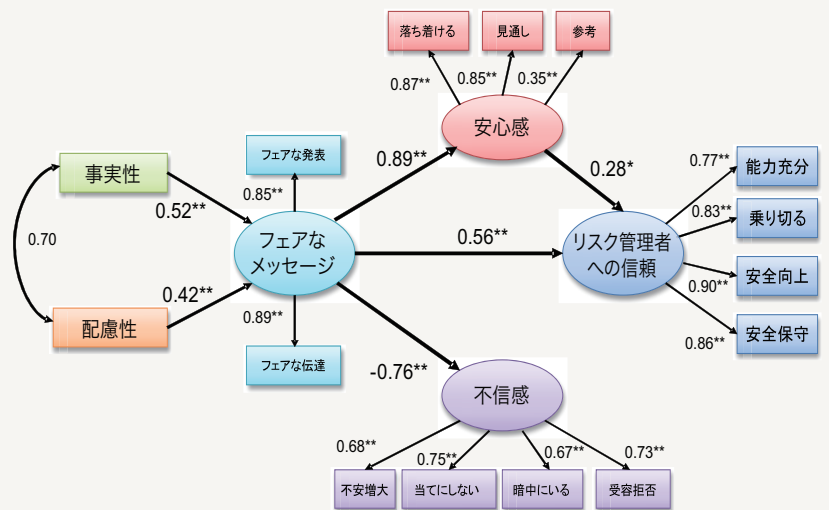
この春ほど「リスク」という言葉を頻繁に耳にした覚えはありません。未曾有の大震災で多くの尊い命が奪われ、その上に日本がいまだかつて体験したことがなかった大きな原子力災害までもが加わりました。うららかな陽

光の下、多くの人が人生の新たなスタートを切る季節になったということでしょう。この研究はリスク心理学と呼ばれる分野の研究です。リスク心理学では、社会にあるさまざまな物や事象に対して人々が抱く「危険感・安全感」を把握することから始めます。危険感や安全感は、その対象に関わる人の行動を左右し、現実の安全性に直結するからです。三陸のある町では明治以降の津波の経験から世界最大規模の防潮堤を築いていました。それにもかかわらず今回の震災では甚大な被害に遭ってしまいました。一方、防潮堤を持たず津波に極めて弱いとされていた町がありました。そこでは全員が地震直後高台に避難して人的被害が最小限にとどまりました。この二つの町の違いは防潮堤の有無によって生じた津波に対する危険感、すなわちリスク知覚の違いであったでしょう。人々のリスク知覚は、現実

のリスクの大きさとずれることが多いのです。この研究では、ずれがなぜ生じるのかのような心理過程を経て起きるのかを明らかにしました。その上でリスクの大きさやリスクに関する情報を伝える「リスクコミュニケーション」をどう行えば、人々が安全を過信することも、またいたずらに恐れることもなく、リスクを理解し対処できるのかを検証してきました。現在、日々刻々と行われている原子力災害の発表はリスクコミュニケーションに他なりません。研究の結論からいうと、リスクコミュニケーションは公正であることが極めて重要です。そして公正であるためには、事実を正確に把握し伝えること、受け手の感情や立場に配慮することの両面が欠かせません【図1】。これを踏まえて、原発とその管理者に対する人々の心理過程を構造方程式モデリングとい

う統計手法で分析した結果が【図2】です。今回の事故以前の分析ですが、リスクコミュニケーションに事実性と配慮性を感じるほど、人々はリスク管理者が公正であると感じ、そのことが不安を減らし、将来的信頼に結びつく心理過程が明らかにされています。さて、今回の原子力災害に関する国や電力会社の発表は、事実性と配慮性を満たし

ているでしょうか。現場の苦悩と混乱と努力を差し引いても、残念ながら及第点は付けられません。一人一人がリスクを理解し適切な行動選択をするためにも、リスクを正しく管理し社会に伝えるためにも、人々の心理過程の解明は重要です。一日も早い原子力災害の収束と被災地の復興を祈りつつ、研究をさらに発展させたいと切に感じています。



【図2】原発リスクにおいてフェアなコミュニケーションが管理者信頼を高める心理過程  
(構造方程式モデリングによる解析結果)  
RMSEA=0.061 n=421 \*\* p<0.01 \* p<0.05 竹西ら(2006)より作成